The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	神仙思想研究小史 : 神仙思想はどのように研究されてきたか (二)
Author(s)	大形, 徹
Citation	中国研究集刊. 2001, 28, p. 46-70
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/61165
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

神仙思想研究小史

——神仙思想はどのように研究されてきたか——（二）

大形　徹

（承前）

三、神仙思想研究のテーマ

ここでは前回とりあげなかった神仙思想関係の論考を便宜上、①神仙術等、②神仙文学・仙伝等、③図像資料等に大別し、さらにいくつかの項目(注1)にわけて簡単に紹介したい。ただし時代はほぼ六朝期ぐらいまでのものに限っている。

①神仙術等

本草

本草全体については中尾萬三「本草の思潮(注2)」・木村康一「本草(注3)」・岡西為人『本草概説(注4)』・荘兆祥他編『本草研究入門(注5)』がある。山田慶兒「本草の起源(注6)」・拙論「本草と方士の関係について(注7)」は、本草の起源を探ろうとしたもので、拙論は本草という言葉が方士や仙薬と深く関わっていることを考察したもの。馬継興主編『神農本草経輯注釈(注8)』は注釈書。傅維康『中薬学史(注9)』・魏子孝・聶莉芳『中医中薬史(注10)』は本草だけでなく煉丹にもふれる。もっとも初期の本草書である神農本草に関しては高橋眞太郎「『神農本草経』に就いて(注11)」・岡西為人「『神農本草経に就いて』を読む(注12)」。拙論「『神農本草経』の神仙観(注13)」は、従来、薬学の立場でしか考察されていなかったこの書について神仙思想の立場から論じたもの。本草書の編纂を行った陶弘景については渡邊幸三「陶弘景の本草に対する文献学的考察(注14)」・赤堀昭「陶弘景と『集注本草』(注15)」・廖育群「陶弘景本草著作中諸問題的考察(注16)」・拙稿「陶弘景(注17)」・麥谷邦夫「陶弘景の医薬学と道教(注18)」がある。ある意

味で本草以前といえる出土資料に関しては赤堀昭・山田慶兒訳注『五十二病方(注19)』・真柳誠「三巻本『本草集注』と出土資料(注20)」。本草と仙薬・道教の関係を論じたものに拙稿「本草と道教(注21)」・松木きか「本草と道教(注22)」・林克「医書と道教(注23)」・山田慶兒『本草と夢と錬金術と物質的想像力の現象学(注24)』がある。亀田一邦「オカルティズムより見た中国の服芝行為に就いて—巫祝・神仙家と催幻覚性菌類—(注25)」は薬物の「芝」について。澁澤尚「『離騒』に詠まれる芳草香木の本草學的考察—巫醫作離騒考序説(注26)」は離騒にみえる薬物の考察。

煉丹

近重真澄『東洋錬金術(注27)』は煉丹に関する問題考察の嚆矢。吉田光邦『錬金術 仙術と科学の間(注28)』は煉丹について考察する基本問題を提示。陳国符には『道蔵源流考(注29)』・『道蔵源流続考(注30)』・『中国外丹黄白法考(注31)』と一連の研究がある。佐中壮『戦国・宋初間の信仰と技術の関係(注32)』は第二章、錬金術の出現、三、劉向と錬金術—劉向の下獄事件—に、この問題が考察されている。J. Needham. "Science and Civilisation in China(注33)" は『中国の科学と文明(注34)』として翻訳されている。李亜東「煉丹術—科学与宗教的畸形(注35)」・趙匡華『中国煉丹術(注36)』・何宗旺『中華煉丹術(注37)』・蒙紹栄・張興強『歴史上的煉丹術(注38)』は煉丹術の全体をとらえたもの。N. セビン『中国の錬金術と医術(注39)』は医学との関連。趙匡光・張恵珍「中国古代煉丹術中諸薬金、薬銀的考釈与模擬試験研究(注40)」・孟乃昌「中国煉丹術"還丹"的演変(注41)」は化学の立場から。島尾永康『中国化学史(注42)』は、第六章が煉丹術、同「丹はいかにして作られたか(注43)」も化学者としての立場から。楠山春樹「淮南中篇と淮南万畢(注44)」は神仙黄白の術とよばれる書についての考察。張覚人『煉丹術と丹薬(注45)』・拙稿「服薬(注46)」・劉広定「中国金丹術的興起与没落(注47)」・三浦國雄「造化の奪取—煉丹術小論(注48)」・坂出祥伸「煉丹術師への道(注49)」・山田慶兒「錬金術者のユートピア(注50)」は仙薬としての煉丹について。徐儀明『外丹(注51)』・拙論「薬物から外丹へ—水銀をめぐる古代の養生思想—(注52)」は、仙薬の水銀について当初、薬物であった水銀が仙薬として使用されていく過程について。拙稿「丹毒で命を落とした人びと(注53)」はその犠牲者の列伝。石田秀実「内丹とは何か(注54)」は外丹に対する内丹について。亀田一邦「葛洪の服餌説における非成仙系服餌の救荒法化について(注55)」はとくに葛洪について。馬済人『道教与煉丹(注56)』は道教との関連で。『長沙馬王堆一号漢墓古尸研究(注57)』の「某

些組織中鉛・汞・宣等毒物分析」は古尸に残存する水銀等を考察したもの。孟乃昌「中国煉丹術原著評介(注58)」は煉丹術関連書籍の紹介。黄兆漢編『道蔵丹薬異名索引(注59)』は難解な丹薬名について。新川登亀男「古代日本と煉丹術(注60)」は日本の煉丹術について。

房中

馬屋原成男監修『医心方 宮内庁書陵部蔵本 巻第廿八 房内(注61)』は日本に伝わる医学書中の房中部分の訳注。周世栄「長沙馬王堆三号漢墓竹簡『養生方』釈文(注62)」は馬王堆関係の初期の釈文。山田慶兒編『新発現中国科学史資料の研究 訳注篇(注63)』には麥谷邦夫による馬王堆出土の『天下至道談』や『十問』などの訳注がある。周一謀譯注『馬王堆漢墓出土房中養生著作釋譯(注64)』・馬継興『馬王堆古医書考釈(注65)』・宋書功編注『中國古代房室養生集要(注66)』はいずれも注解書だが論文も収録。猪飼祥夫「七損八益考(注67)」は房中技術に関する論考。拙論「老子と房中術(注68)」は『老子』が新出土資料の房中関係の書物と関わること、また『列仙伝』で仙人とされる老子が房中術によって昇仙したとされることなどについて。坂出祥伸「彭祖伝説と『彭祖経』(注69)」・同「八百歳生きた仙人・彭祖(注70)」は房中関係で有名な仙人、彭祖について。石田秀実「初期の房中養生思想と仙説(注71)」は仙術としての房中について。蓋建民「道教房中術的性医学思想及現代価値(注72)」・朱越利『馬王堆帛簡書房中術産生的背景(注73)』・樊雄『中国古代房中文化探秘(注74)』はその理論と意味について。

養生

坂出祥伸編『中国古代養生思想の総合的研究(注75)』は養生関係の論文集。坂出祥伸には他に「神仙思想の身体観—養形と内観を中心に—(注76)」・「張湛『養生要集』佚文とその思想(注77)」・『道教と養生思想(注78)』・『「気」と養生 道教の養生術と呪術(注79)』・『中国思想研究—医薬養生・科学思想編(注80)』があり、「導引」・「呼吸法」・「房中術」・「陶弘景の服薬煉丹(注81)」などについて考察されている。周世榮編著『馬王堆養生気功(注82)』は馬王堆出土資料、高大倫『張家山漢簡《引書》研究(注83)』は張家山出土の『引書』についての研究、拙稿「中国の養生術(注84)」もそのあたりのもの。張欽『道教煉養心理学引論(注85)』は、守一・存思・服気・胎息・房中・内丹等について論じたもの。馬場英雄「嵇康の養生論について(注86)」は六朝の嵇康の養生思想について。三浦國雄『気の中国文化 気功・養生・風水・易(注87)』は一部に養生関係のものを含む。鄭

金生『中国古代的養生(注88)』は養生思想全体をとらえたもの。方春陽主編『中国養生大成(注89)』・洪丕謨『中国神仙養生大全(注90)』は養生関係の資料集成。麥谷邦夫「穀食忌避の思想—辟穀の伝統をめぐって—(注91)」は、穀物は陰濁の不純の気であるため、辟穀の思想が起こったととらえている。

②神仙文学・仙伝等

老子

老子は諸子や老荘思想としてのものは省略し、神仙道教に関連するもののみをとりあげた。劉国鈞「老子神格化攷(注92)」・アンナ・ザイデル「漢代における老子の神格化について(注93)」・楠山春樹『老子伝説の研究(注94)』・拙稿「太上老君(注95)」・原田二郎「老子の神格化と太上老君(注96)」はいずれも老子が仙人をへて太上老君となる過程を考察したもの。内藤幹治「河上公注老子の養生説について(注97)」と原田二郎「『老子想爾注』の長生の理論(注98)」は『老子』の書にみえる養生理論の考察。拙稿「道教と老荘(注99)」は、老荘思想と道教の違いを「不死の仙人」になろうとしたかどうかの差としてとらえたもの。

黄老

黄老は前漢初期は政治思想だが、後漢には神仙思想となる。他に法家に近い出土資料を黄老とみなすものもある。顧頡剛「黄老之言(注100)」・陳啓爬「黄老(注101)」は初期の考察。浅野裕一『黄老道の成立と展開(注102)』は戦国末から漢初にかけて黄帝と老子の書がどのように結合されていくかをさぐる労作。漢初を中心とするものには王婆楞「略談黄老学派(注103)」・金谷治「漢初の道家思潮(注104)」、内山俊彦「漢初黄老思想の考察(一)・(二)(注105)」・岩佐昌暲「〈黄老〉派の輪郭—道家学派成立史試論—(注106)」・周紹賢「黄老思想在西漢(注107)」・拙論「漢初の黄老思想(注108)」・姜広輝「試論漢初黄老思想(注109)」・斎木哲郎「黄老思想の再検討—漢の高祖集団と老子の関係を中心として—(注110)」がある。楊秀実「黄老思想与東漢政治(注111)」は後漢の黄老。木村英一「黄老から老荘および道教へ—両漢時代に於ける老子の学—(注112)」・秋月観暎「黄老観念の系譜—その宗教的展開を中心として—(注113)」・楠山春樹「道教における黄帝と老子(注114)」は道教との関わり、安居香山「後漢末における黄老と仏教—仏教の中国的受容についての一考察—(注115)」は仏教との関連。丁原明『黄老学論綱(注116)』は全体をとらえたもの。

真人

真人は『荘子』の語だが、後世、仙人の意味でも使われるようになる。白川静「真字論(注117)」は「真」という文字について甲骨・金文学の立場からの興味深い論考。吉川忠夫「真人と革命(注118)」・同「真人と聖人(注119)」は『荘子』にはじまる真人の問題とその展開を論じている。ただし「真」の文字の解釈としては、『説文解字』の字形の説明にもとづくのみで近来の甲骨・金文にもとづく文字学の成果を援用していないのは惜しまれる。拙論「『荘子』にみえる『化』と『真人』について(注120)」は『荘子』にみえる「真人」と「化」についての考察。澁澤尚「『列子』における至人と「虚」の思想(注121)」は、『荘子』にもみえる「至人」について。

方士

方士は方術を使う士だが、仙人の存在を説いたのが方士であり、その術は仙術とも通じる。崇天「方士源流述略(注122)」は方士の起源について。陳槃には「古方士釈名(注123)」・「戦国秦漢間方士考論(注124)」がある。鎌田重雄「方士考(注125)」・拙稿「方士(注126)」は方士そのものに関する考察。楊寛「方士的医薬・養生・修練和求神仙的方技(注127)」は戦国時代における方士の活動をとらえたもの。石介文「"方仙道"解(注128)」・賀聖迪「燕斉方仙道与科学技術(注129)」は『史記』に見える方仙道について。張維華「漢武帝伐大宛与方士思想(注130)」は武帝の西域討伐と方士の関係をいう。酒井忠夫「方術と道術(注131)」は方士の方術と道士の道術。坂出祥伸「方術伝の成立とその性格(注132)」、山田利明「誕怪不経の正史—『後漢書』方術伝の哲学—(注133)」は方術伝について。坂出祥伸『中国古代の占法 技術と呪術の周辺(注134)』・拙稿「方術(注135)」・李零『中国方術考(注136)』はいずれも方術について。中前正志「ある方術の行方—遠救火災譚の流れの中で—(注137)」は方術で遠くの火災を消す話に関しての考察。黄意明『符呪(注138)』は方術の一つである符呪に関してのもの。拙稿「仙術(注139)」は仙術について。

徐福(注140)

徐福もまた方士だが、これに関しては話が多いため、別に項目をたてた。高於菟三「徐福東来考(一)・(二)(注141)」・後藤粛堂「徐福東来の伝説について(一)〜(五)(注142)」・島田正郎「徐福伝承成立の基盤(注143)」・原田淑人「徐福の東海に仙薬を求めた話(注144)」がある。汪向栄「徐福、日本的中国移民(注145)」・『徐福研究論文集(注146)』は中国人の論考。安志敏他『徐福伝説を探る(注147)』は日中合同シンポジウムで、日本側からは梅原猛・樋口隆康・金関恕・陳舜

臣・福永光司などが参加している。柴田清継に「徐福に関する中国の伝説(上)・(下)(注148)」・同「徐福齎書説について(注149)」・同「徐福と日本—元明両代資料述評—(注150)」・同「徐福と日本—清代資料述評—(注151)」と一連の精力的な考察がある。なお徐福に関して学術的でないものは省略した。

蓬莱山

蓬莱山は仙人が住むとされた山で『史記』にみえる。佐中壮「三神山とマラヤ島(注152)」は蓬莱山など三神山とマラヤ島との関連を考察したもの。拙稿「仙境思想(注153)」および伊藤清司『死者の棲む楽園—古代中国の死生観(注154)』は蓬莱山を他界と考えている。

崑崙山

崑崙山も西王母などの神仙が住むとされた山である。御手洗勝に「崑崙伝説の起源(注155)」があり、同『古代中国の神々(注156)』には「鄒衍の大九州説と崑崙伝説」・「崑崙伝説と永劫回帰」などがみえる。凌純声「中国的封禅与両河流域的昆侖文化(注157)」は封禅説との関わり。凌純声「昆侖丘与西王母(注158)」は西王母との関係。伝説・神話としての観点は鐵井慶紀「崑崙伝説についての一試論—エリアーデ氏の『中心のシンボリズム』に立脚して—(注159)」・白川静『中国の神話(注160)』・湯恵生「神話中之昆侖山考述—昆侖山神話与薩満教宇宙観—(注161)」にみえる。不死や昇仙に関しては、杜而未『崑崙文化與不死觀念　國学難題解釋(注162)』・曽布川寛『崑崙山への昇仙　古代中国人が描いた死後の世界(注163)』がある。李豊楙「崑崙、登天与巫俗伝統(注164)」は巫覡との関係を見る。澁澤尚「『昆侖』とその同系語についての一考察(注165)」は音韻からの考察、澁澤には「昆侖と祭祀壇—『明堂』との関係において—(注166)」もある。

秦始皇・漢武帝・封禅

秦の始皇帝と漢の武帝はともに神仙を求めた。武帝の封禅は神仙探索と関わっている。始皇帝の昇仙願望に関しては蔣君章「秦皇漢武尋求神仙之用意(注167)」・斎藤実「秦の始皇帝の泰山封禅(注168)」・桐本東太「不死の探求—始皇帝巡狩の一側面(注169)」・同「始皇帝と封禅(注170)」・楠山春樹「試論　始皇求仙の真相(注171)」・拙稿「始皇帝の不死幻想(注172)」がある。楠山春樹「聖王と仙王(注173)」は始皇と武帝を会わせて論じる。石合香「漢武帝における太初暦制定の真の意図—不死を求めて—(注174)」は武帝の昇仙願望を暦の制定と絡めて考察した興味深い論考。神塚淑子

「祭祀と祈祷、1神仙思想と祭祀・祈祷(注175)」では神仙思想と祭祀の問題を秦の始皇帝・漢の武帝・『列仙伝』の例等から論じる。封禅に関しては、木村英一「封禅思想の成立(注176)」・福永光司「封禅説の形成—封禅説と神僊説—(注177)」・同「封禅説の形成(続)(注178)」がある。

西王母

西王母は女神で、神仙を統括するものとされる。施芳雅「西王母故事的衍変(注179)」・李豊楙「西王母五女伝説的形成及其演変(注180)」・納谷由美子「西王母伝承の変化について(注181)」は西王母の故事の変遷をさぐったもの。小南一郎『中国の神話と物語(注182)』は、第一章 西王母と七夕伝承 第二章「西京雑記」の伝承者たち 第三章「神仙伝」—新しい神仙思想 第四章「漢武帝内伝」の成立、の四章から成っており、それぞれに精緻な考察がなされている。同氏には『西王母と七夕伝承(注183)』もある。鄭志明編『西王母信仰(注184)』はその信仰に就いての考察。

神仙

ここには「神仙」等の語がみえるものを集めた。石島快隆「道家と神仙との思想史的研究・続(注185)」、周紹賢『道家與神仙(注186)』は道家と神仙との関連を思想史的に考察したもの。黄海德『天上人間 道教神仙譜系(注187)』・李小光「道教神仙思想的心理学分析(注188)」は道教との関連。蕭登福『先秦兩漢冥界及神仙思想探原(注189)』は死後の世界と神仙思想を合わせて論じたもの。鄭土有『嶢望洞天福地 中國的神仙與神仙信仰(注190)』は神仙の信仰について、黄立平『中国古代神仙祖廟百例(注191)』は実際にある神仙の廟について。李輝英「漢代的神仙故事及其他(注192)」・姜竹亭・李伝理編著『中国神仙故事(注193)』・張迅齊編著『神仙列傳(注194)』・『神仙世界 中国神仙故事大観(注195)』・冷立范編著『中国神仙大全(注196)』・『中國神仙傳記文獻初編(注197)』・白辰他編著『中国神仙鬼狐傳奇(注198)』はいずれも神仙故事について。櫻井龍彦「王子喬・赤松子伝説の研究(1)・(2)(注199)」、拙論「松喬考—赤松子と王子喬の伝説について—(注200)」は、古仙人として古くより「松喬」と連語化されて称される赤松子と王子喬について論じたもの。前田繁樹「六朝時代に於ける干吉伝の変遷(注201)」は干吉の伝記について。金秀雄「神仙の誕生—嵇康と郭璞の場合(注202)」は嵇康と郭璞について。尾崎正治「寇謙之の神仙思想—神瑞二年(415)までを中心として—(注203)」は寇謙之について。服部克彦「北魏洛陽時代にみる神仙思想(注204)」は北魏洛陽と時代・地域を限定しての考察。拙論「中国人と道教—『東遊記』の八仙をめぐって

―(注205)」は八仙の一人一人について『東遊記』にみえる記述を中心に論じたもの。宮川尚志「謫仙考(注206)」は天界を追われた仙人について。李豊楙「神仙三品説的原始及衍変(注207)」は神仙三品説に関しての考察。今枝二郎「神仙関係文献に現れたる災祥思想(注208)」は災祥思想について。陳開科『中国神仙探玄(注209)』・前田繁樹「神仙思想の系譜(注210)」・拙稿「神仙思想(注211)」は神仙思想全体に関する考察。小南一郎「壺型の宇宙(注212)」・伊藤丈「壺中天をめぐる一考察(注213)」は壺中天について。

道教

ここでは道教の中で神仙思想と関わるものについてのみ取り上げた。趙宗誠「神仙思想與道教(注214)」・小南一郎「尋薬と存思へ―神仙思想と道教信仰の間(注215)」は神仙思想と道教の関係について。四川大学宗教研究所編『道教神仙信仰研究(注216)』は道教や神仙思想に関する概括的な研究。葛兆光『道教と中国文化(注217)』は中国文化という大きな流れの中で道教をとらえたもの、神仙関係の考察もみえる。小林正美『六朝道教史研究(注218)』・同『中国の道教(注219)』は葛洪の神仙道を道教とはみなさない。ほかに吉川忠夫編『六朝道教の研究(注220)』・同『中國古道教史研究(注221)』・神塚淑子『六朝道教思想の研究(注222)』は上記で紹介したいくつかの論考が紹介されている。吉川忠夫『中国人の宗教意識(注223)』は宗教意識について。

『列仙伝』

『列仙伝』は最古の仙人の伝記集。マックス・カルタンマルク『『列仙伝』与列仙―『列仙伝』法文訳本序文―(注224)』・Marx Kaltenmark『Le Lie-Sien Tchouan : biographies legendaires des immortels taoistes de l'antiquite(注225)』はフランス人のカルタンマルク氏によるもの。福井康順「列仙伝考(注226)」は『列仙伝』全般に就いての考察。内山知也「仙伝の展開―『列仙伝』より『神仙伝』に至る―(注227)」は中国文学の立場から仙伝を考察。拙論「『列仙伝』にみえる仙薬について(注228)」は『列仙伝』にみえる薬物について『神農本草経』などと比較して考察したもの。トーマス・スミス「六朝における佛道論争と『列仙伝』の伝承(注229)」は仏道論争の中で『列仙伝』をとらえる。訳注として前野直彬『山海経 列仙伝(注230)』、沢田瑞穂訳『列仙伝・神仙伝(注231)』・王叔岷『列仙傳校箋(注232)』・滕修展他『列仙傳神仙傳注訳(注233)』がある。尾崎正治・平木康平・大形徹『鑑賞中国の古典⑨抱朴子・列仙伝(注234)』は平木康平・大形徹が『列仙伝』を担当、これまで訳されたことのない讃も訳出され、話ごとに比較的長文の解説

がつけられている。平木康平・大形徹編『列仙伝(注235)』は和刻本の影印だが、頭注をほどこし、道蔵本その他との校勘をおこなっている。

『神仙伝』

『神仙伝』は葛洪の作とされる。仙人の伝記、ただし現在見ることのできるものは葛洪の原本ではないとされている。福井康順「神仙伝考(注236)」・同「神仙伝続考(注237)」・拙稿「神仙伝(注238)」は『神仙伝』の成立などについて論じたもの。小南一郎「『神仙傳』の復元(注239)」は古来、その成立に疑問のある『神仙伝』を復元しようとしたもの。土屋昌明「『歴世真仙体道通鑑』と『神仙伝』(注240)」・亀田勝見「『神仙伝』再検討のために—諸本における仙伝の配列から見て—(注241)」も同様の試み。手塚好幸「費長房説話と『神仙伝』(注242)」・土屋昌明「四庫本『神仙伝』の性格および構成要素—特に『陰長生伝』をめぐって(注243)」・「真人・陰長生の伝説について(注244)」・「神仙李八百伝考(注245)」・下見隆雄「『神仙伝』について—『後漢書』方術伝との相違、左慈・劉根の場合(注246)」は神仙伝中の仙人について。福井康順『神仙伝(注247)』は訳注、その他の訳注は『列仙伝』の項を参照。

葛洪・『抱朴子(注248)』

神仙思想関係のもので、もっとも著作や論考が多いものは西晋の葛洪（二八三～三四三）の『抱朴子』であろう。その煉丹に関する記事の豊富さ、左慈・葛玄・鄭隠・葛洪と続く師資相承の系譜など興味をひく点がいくつもあり、道教関係の学者の多くが葛洪や『抱朴子』の研究をしている。ただし『抱朴子』は内篇が神仙関係であり、外篇は儒学にかかわる部分が多い。そのため外篇のみに関わる論考は省略した。小島祐馬「抱朴子と道家思想(注249)」は道家との関わりについて。小柳司気太・飯島忠夫「抱朴子内篇(注250)」は『抱朴子』内篇についての論考。李豊楙『不死的探求～葛洪抱朴子内篇研究(注251)』も同様。李豊楙には「葛洪養生思想之研究(注252)」もある。松井等「葛洪と不老長生(注253)」は不老長生について。小田竜明「抱朴子について—道教成立の一過程—(注254)」は道教の理解のために『抱朴子』を解読。大谷湖峰「葛洪の著書に関する研究—道蔵成立研究の一節として—(注255)」・石島快隆「抱朴子引書考(注256)」・佐中壮「孫星衍本抱朴子の研究(注257)」は書誌学的考察。牧野巽「抱朴子の自叙伝(注258)」・佐中壮「葛洪の生涯とその風格(注259)」・大淵忍爾「葛洪伝考—晋朝治下呉人の在り方の一例—(注260)」・王利器「葛洪論(注261)」は葛洪の伝記について。重沢俊郎「抱朴子に於け

る統一の理念(注262)」・村上嘉実「抱朴子外篇について—その内篇との関係について—(注263)」は『抱朴子』の内篇と外篇の内容の不統一を問題にしたもの。村上嘉実には「抱朴子における不老長生の思想(注264)」・「葛洪の世界観(注265)」・『中国の仙人 抱朴子の思想(注266)』・「鬼神と仙人(抱朴子研究の内)(注267)」・「抱朴子の科学思想(注268)」・「漢墓新発現の医書と抱朴子(注269)」もある。村上嘉実『六朝思想史研究(注270)』の中では、「道教における欲望肯定の思想(注271)」・「鬼神を超克する仙道(注272)」が『抱朴子』をあつかっている。佐中壮「抱朴子の方法論と現代歴史学(注273)」は歴史学との関連。福井康順には「葛氏道と仏教(注274)」・「葛氏道の研究(注275)」がある。大淵忍爾には「抱朴子研究序説(注276)」・「抱朴子における神仙思想の性格(注277)」があり、神仙思想が正面から論じられている。伊東倫厚「抱朴子における神仙の実在の証明(注278)」も執拗に説かれる神仙実在の証明の方法についての論考。李剛「葛洪神仙学隠含的認識論(注279)」・同「葛洪及神仙学(注280)」は葛洪の神仙思想について。中嶋隆蔵「葛洪の神仙術—その理論と実践—(注281)」は神仙術としてとらえている。宮沢正順「抱朴子と張角一派(注282)」は張角との関係を。同「抱朴子における本末思想(注283)」は本末という観点から。同「葛洪の老子批判について(注284)」は『抱朴子』中に見える老子についての考察。同「道教の食文化論—抱朴子内篇を中心として—(注285)」は食文化との関連からの考察。石島快隆には「葛洪の儒家及び道家思想の系列とその系譜的意義について(注286)」・「魏伯陽と葛洪との道家思想について(注287)」・「抱朴子の思想史的考察(注288)」がある。平秀道「抱朴子と讖緯(注289)」は讖緯思想の観点からの考察。御手洗勝「斎と錬金・煉丹—抱朴子内篇を媒介として—(注290)」は道教の斎と錬金・煉丹術との関連をさぐる。吉川忠夫「抱朴子の世界(上)・(下)(注291)」・平木康平「『抱朴子』の世界(注292)」・藍秀隆『抱朴子研究(注293)』・胡孚『魏晋神仙道教 抱朴子内篇研究(注294)』・拙稿「抱朴子(注295)」は抱朴子の全体像をとらえようとしたもの。吉川忠夫には「師受考—抱朴子内篇によせて—(注296)」という師承関係についての考察もある。下見隆雄「葛洪の逸民(注297)」・同「抱朴子に於ける逸民と仙人(注298)」・同「抱朴子外篇における隠者賛美の意味(注299)」は『抱朴子』にみえる逸民と仙人について言及したもの。神楽岡昌俊「抱朴子における隠逸思想(注300)」も隠逸思想研究の立場からの考察。林田慎之助「葛洪の文芸思想(注301)」は文学の立場からのアプローチ。尾崎正治「道教の仙道修行(注302)」は仙人に成るための修行についての考察。「葛洪与魏晋丹鼎道派(注303)」は煉丹について。徐儀明・冷天吉『人仙之間《抱朴

子》与中国文化(注304)』は神仙思想を中国文化の中でとらえる。福井文雅「『抱朴子』葛洪の詭弁(注305)」は抱朴子の論証方法が詭弁に満ちていることを説く。訳注としては、石島快隆『抱朴子(注306)』・村上嘉実『抱朴子(注307)』は原文を訓読したもの。本田済『抱朴子(注308)』は現代語訳と注釈。王明『抱朴子内篇校釋(注309)』は注釈が詳しく評価が高い。前掲、尾崎正治・平木康平・大形徹『鑑賞中国の古典⑨抱朴子・列仙伝(注310)』は尾崎正治が『抱朴子』を担当、抄訳。張廣保編著『抱朴子内篇(注311)』・李中華注譯・黄志民校閲『抱朴子(注312)』は中国語の現代語訳に注釈。施博爾主編『抱朴子内篇通検(注313)』は索引。

陶弘景・『真誥』

陶弘景は六朝道教の大成者として著名。その著に『真誥』がある。石井昌子に『陶弘景の道教学の一考察(注314)』・『道教学の研究 陶弘景を中心に(注315)』がある。砂山稔『陶弘景の思想について—その仙道理論を中心に—(注316)』は神仙理論について。釜谷武志「『眞誥』の詩と色彩語—あかい色を中心に(注317)」は色彩を中心にした考察。訳注に石井昌子『稿本真誥(注318)』1～4・同『真誥(注319)』・吉川忠夫・麥谷邦夫編『眞誥研究 譯注篇(注320)』。索引に麥谷邦夫編『眞誥索引(注320)』。

神仙文学

神仙を慕った遊仙詩、神仙に関する小説がある。康萍『魏晋遊仙詩研究(注322)』・吉岡義豊「遊山慕仙詩とその思想的背景(注323)」・李豊楙「六朝道教与遊仙詩的発展(注324)」・同『憂与遊—六朝隋唐遊仙詩論集(注325)』・洪順隆「試論六朝的遊仙詩(注326)」・釜谷武志「遊仙詩の成立と展開(注327)」は遊仙詩全体について。小西昇「漢代楽府詩と神仙思想(注328)」・沢口剛雄「漢の楽府における神仙道家の思想(注329)」・玉田継雄「漢代における楽府の神仙歌辞と鏡銘(注330)」はともに『楽府』にみえる神仙思想についての考察。李豊楙「六朝楽府与仙道伝説(注331)」は六朝の『楽府』に関して。船津富彦「郭璞の遊仙詩の特質について(注332)」・游信利「郭璞遊仙詩的研究(注333)」は郭璞について。船津富彦「嵇康文学に投影せる神仙(注334)」・馬場英雄「嵇康における『神仙』思想と『大道』の理想について(注335)」は嵇康について。船津富彦「魏武帝の遊仙文学について(注336)」は魏の武帝について。同「神仙説話について—短篇白話小説に関する一考察—(注337)」は白話小説についての論文だが、神仙思想の歴史についても概観している。李豊楙『六朝隋唐仙道類小説研究(注338)』は仙道小説について。王青「『漢武帝内伝』研究(注339)」は漢武帝内伝に関

して。

日本の神仙思想

日本の神仙思想の研究には、下出積與『神仙思想(注340)』・同『古代神仙思想の研究(注341)』・知切光歳『仙人の研究(注342)』・松田智弘『古代日本の道教受容と仙人(注343)』がある。藤井清「大伴旅人の神仙観(注344)」は大伴旅人についてのもの。日本に伝わる神仙思想は体系的なものとは言い難い。

③図像資料等

図像資料としては鏡背・画像石などがある。水野清一「漢代の仙界意匠に就いて(注345)」・姚鑑「漢代的神仙画(注346)」・成寅編『中國神仙畫像集(注347)』は美術の立場からの論考。駒井和愛『中国古鏡の研究(注348)』・内野熊一郎「漢碑漢鏡に現はれた道教的資料(注349)」・張金儀『漢鏡所反映的神話傳説與神仙思想(注350)』・西村俊典「写された神仙世界(注351)」・内野熊一郎『中国古代金石文における経書讖緯神仙説攷(注352)』は鏡背ならびにその銘文についての考察。土居淑子『古代中国の画象石(注353)』・林巳奈夫『漢代の神神(注354)』・同『石に刻まれた世界(注355)』・渡部武『画像が語る中国の古代(注356)』・宇佐美文理「思想と図像—漢代の死生観と画像石(注357)」・信立祥『中国漢代画像石の研究(注358)』・小南一郎『画像資料を中心とした神仙思想の研究(注359)』・兪美霞『東漢畫像石與道教發展(注360)』は主に画像石に関する研究である。

小結

便宜上、上記のように項目分けしたが、それぞれが大きなテーマである。また二つ以上の項目にまたがっている場合もある。神仙思想はそれぞれの項目に深くかかわっており、その研究のためには、すべてを包括し見通した研究が必要だろう。

秦の始皇帝の時、方士の徐市(福)が、蓬莱山があり、仙人がいると説いた。そのことを契機として仙人説は急速に広まることとなる。蓬莱山は蜃気楼現象にもとづく浮島であって、にわかに出現し、あてどなくさまよう。おそらく斉の地にふるくより伝わっていた他界観念と重複しているのだろう。一方、崑崙山に関してはかつては外国起源であるとされてきたが、葫蘆などと音通ではないかともいう。そうなると魂の容器にもとづく他界ともみなせる。

仙人・仙者といった語は『史記』に初めてみえ、また羨

門高などごく数名だが、具体的な仙人の名前もみえる。古仙人と称すべき者たちだが、その一人一人に対する詳細な研究はほとんどない。また方士の仙道ということで方仙道ともよばれる。これらの仙人と尸解仙の関係も説かれているが、当時の方士と仙人との関係から考えねばならないだろう。尸解仙はいったん死ぬことにより、仙人となることであるが、当時の葬送儀礼や死生観とも深く関わっていると考えられる。また「仙」と「僊」の本来の意味、その相互の関係という、もっとも基本的な問題に関しても、ほとんど考察されていない。

赤松子や王子喬も仙人とされるが、『史記』などにみえる漢初の伝説と『列仙伝』の伝説には内容に大きな乖離があり、同名の別の仙人といってもよいほどである。初期の仙人の伝説を一人ずつ取り上げたものは、まだまだ数が少ないといえる。

一方、始皇帝や漢の武帝と神仙思想の関係の考察も、両者がともにとくに有名な天子であることを考えると多いとはいえない。始皇が神仙を探索し不死を求めたことは、始皇自身の心理の問題と多分に関わってくるが、壮大な始皇の陵墓の造営はむしろ死後の魂の安寧を求めたもので、そこには大きな矛盾がある。これは当時の死生観ともあわせて考察しなければならない問題であろう。

一方、導引・行気・房中術・辟穀などは本来は気に関わる長生術であろう。しかし、ごく初期のころから仙人と結びつけられ仙術とみなされている。このような長生術から生まれた仙人と先にみた尸解仙との関連もいまだ十分に考察されていない。

このように仙人説があらわれた初期の段階における問題は、そのほとんどがいまだ解明されていないといえる。そしてそのような状況のもとで仙人の数はふえていき、最初の仙人の伝記集である『列仙伝』が作られることとなる。ここには黄帝や老子など著名な人物も仙人として取りこまれている。『列仙伝』は前漢の劉向の撰だとされるが、地名などより後漢の作ではないかとされている。ところがその本当の作者については不明である。ここにあらわれる七十余名の仙人のそれぞれについても具体的に研究したものはほとんどない。

『神仙伝』は葛洪が作った書だが、現今のものは輯本だとされ、原本とは異なるとされている。そのため研究も原本の復元にかかわるものが多く、その内容の取り扱いにも注意が必要である。『神仙伝』以後のさまざまな仙伝の研究は事実上、ほとんどなされていない。

葛洪の『抱朴子』に関してはかなりの研究の蓄積がある。この書は内篇が神仙思想、外篇が儒教の書とされ、

初期にはその矛盾について指摘し、考察するものもあった。最近の研究はほとんどが内篇にかぎられている。この書物のなかには神仙思想に関わるさまざまな問題が詰めこまれている。神仙思想を研究する者にとっては無視することの許されない書物である。また神仙思想は道教の中での重要な位置をしめるのだが、道教の中でどのような役割を果たしていたのかという問題もある。

一方、漢から六朝・唐にかけて多くの知識人が遊仙詩をつくっている。詩の内容と実際に神仙になろうとしたこととは必ずしも結びつかず、その関係についても考察する必要があるだろう。日本の文化もまた神仙思想の影響を受けている。しかしながらそれは儒教や道教の場合と同様に体系としての神仙思想が入ってきているわけではない。

また漢代の鏡や画像石などの中に羽人・芝草・西王母など神仙思想と密接に関わる図像がみえる。鏡には銘文が付されているものがあるが、画像石には文字の説明はほとんどない。画像はそれ自体で発展変化する傾向があり、文字資料とつきあわせた場合も必ずしも明快な結論が得られないのが難点である。

前号でとりあげた尸解仙の問題、さらに上記でとりあげた項目の一つ一つについて十分に理解し、それらが相互にどのように影響しあっているかを考察した上で、はじめて神仙思想の全体像が把握できるように思われる。しかしながら、まだそのような書物は現れていないといえる。

注

(1) 項目の上げ方およびその分類は便宜的なものとなった。あくまでも指標である。なお内容が二つの項目にわたる場合はどちらか一つに取り上げた。また紙幅の都合上、ごく簡単なコメントしか付していない。項目内では内容の近いものをさらにまとめたが、基本的な配列は発表年代順である。

(2) 岩波講座東洋思潮、東洋思潮の展開、支那思想、岩波書店、一九三四年。

(3) 『支那地理歴史大系』8（支那地理歴史大系刊行会編、白揚社、一九四二年）所収。

(4) 創元社、一九七七年。

(5) 中文大学出版社、一九八三年。

(6) 『中国古代科学史論』、一九八九年。

(7) 「人文学論集」第8集、大阪府立大学人文学会、一九九〇年。

(8) 人民衛生出版社、一九九五年。
(9) 巴蜀出版社、一九九三年。
(10) 文津出版社、一九九四年。
(11)『日本醫学雑誌』一三二〇号、一九四三年。
(12)『日本醫学雑誌』一三二三号、一九四四年。
(13)「東方宗教」77号、日本道教学会、一九九一年。
(14)『東方学報』京都、第二〇冊、一九五一年。のち渡邊幸三『本草書の研究』(武田科学振興財団、一九八七年)に再録。
(15) 山田慶兒編『中国の科学と科学者』(京都大学人文科学研究所、一九七八年)。
(16)『中華医史雑誌』第一二巻二号、一九九二年。
(17) 橋本高勝編『中国思想の流れ(上)』、晃洋書房、一九九六年。
(18) 吉川忠夫編『六朝道教の研究』(京都大学人文科学研究所研究報告、春秋社、一九九八年)所収。
(19) 人文科学研究所、一九八五年。
(20)『日本医史学雑誌』第三九巻第一号、一九九三年。
(21)『「道教」の大事典』、新人物往来社、一九九四年。
(22) 前掲『講座 道教』第三巻、道教の生命観と身体論、所収。
(23) 野口鐵郎編集代表『講座 道教』第三巻、三浦國雄・堀池信夫・大形徹編、道教の生命観と身体論、雄山閣出版、二〇〇〇年。
(24) 朝日新聞社、一九九七年。
(25)『東方宗教』八九、一九九七年。
(26)『立命館文學』第五六三号、二〇〇〇年。
(27) 内田老鶴圃、一九二九年。
(28) 中公新書、中央公論社、一九六三年。
(29) 中華書局、一九六三年。
(30) 明文書局、一九八三年。
(31) 上海古籍出版社、一九九七年。
(32) 皇学館大学出版部、一九七五年。
(33) University Press. Vol. V-2 (1974) ;Vol. V-3 (1976) ; Vol. V-4 (1980)。
(34) 監修、東畑精一・藪内清、思索社。
(35)『自然辨證法通訊』87-3、一九八七年。
(36) 中華書局、一九八九年。
(37) 文津出版社、一九九五年。
(38) 上海科技教育出版社、一九九五年。
(39) 中山茂・牛山輝代訳、思索社、一九八五年。N. Sivin, "Chinese Alchemy:Preliminary Studies" (一九六八年)にもとづく。
(40)『自然科学史研究』87-2、一九八七年。
(41)『自然科学史研究』87-6-2、一九八七年。
(42) 朝倉書店、一九九五年。

(43) 同右。
(44)『道家思想と道教』(平河出版社、一九九二年) 所収。
(45) 与野書房、一九八九年。
(46) 前掲『「道教」の大事典』。
(47)『歴史』一九九五年、四月号。
(48)『しにか』Vol.6/No.11 (大修館書店、一九九五年)、特集「煉丹術とは何か—不老不死の探求」。
(49) 同右。
(50)『日本研究』、国際日本文化研究センター、一九九六年。
(51) 中華書局 (香港)、一九九七年。
(52) 前掲『講座 道教』第三巻、道教の生命観と身体論、所収。
(53) 同右。
(54) 同右。
(55)『六朝学術学会報』1、一九九九年。
(56) 文津出版社、一九九七年。
(57) 湖南医学院主編、文物出版社、一九八〇年。
(58)『世界宗教研究』、一九八四年、第十期。
(59) 台湾学生書局、一九八九年。
(60) 同右。
(61) 飯田吉郎訓読、石原明解説、至文堂、一九六七年。
(62)『長沙馬王堆医書研究専刊』第二輯、湖南中医学院、一九八一年。
(63) 人文科学研究所、一九八五年。
(64) 海峰出版社、一九九〇年。
(65) 湖南科学技術出版社、一九九二年。
(66) 百川書局、一九九二年。
(67)『東洋史苑』第三二号。
(68)「人文学論集」第9集、大阪府立大学人文学会、一九九一年。
(69)『新発現中国科学史資料の研究 論考篇』、一九八五年。のちに『道教と養生思想』(ぺりかん社、一九九二年) 所収。
(70)『斯文』106、一九九九年。
(71)『東方宗教』第七七号、一九九一年。
(72)『宗教学研究』、一九九六年—1。
(73)『中華医師雑誌』一九九八年—1。
(74) 広西民族出版社、一九九三年。
(75) 平河出版社、一九八八年。
(76)『理想』604、一九八三年。
(77)『東方宗教』第六八号、一九八六年。
(78) ぺりかん社、一九九二年。
(79) 人文書院、一九九三年。
(80) 関西大学出版部、一九九九年。
(81) 吉川忠夫編『六朝道教の研究』に「陶弘景における服薬・

煉丹」として収められていたもの。

(82) 湖北科學技術出版社、一九九〇年。

(83) 巴蜀書店、一九九五年。

(84) ポーラ文化研究所『is』69号、一九九五年。

(85) 巴蜀書社、一九九九年。

(86)『國學院大学雑誌』九五-一〇。一九九四年。

(87) 創元社、一九九四年。

(88) 商務印書館国際有限公司、一九九七年。

(89) 吉林科学技術出版社、一九九二年。

(90) 中国文聯出版公司、一九九四年。

(91) 京都大学人文科学研究所、東方学報　京都第七二冊、二〇〇〇年。

(92)『金陵学報』4-2、一九三四年。

(93) 吉岡義豊、M.スワミエ編『道教研究』3、豊島書房、一九六五年。

(94) 創文社、一九七二年。

(95) 日原利国編『中国思想辞典』研文出版、一九八四年。

(96) 前掲『講座 道教』第一巻。

(97)『吉岡博士還暦記念道教研究論集—道教の思想と文化—』、吉岡義豊博士還暦記念論集刊行会編、国書刊行会、一九七七年。

(98)『中哲文学会報』8、一九八三年。

(99) 加地伸行編『老荘思想を学ぶ人のために』(世界思想社、一九九七年) 所収。

(100) 前掲『秦漢的方士与儒生』所収。

(101)『雅言』1-11、一九三九年。のちに『哲学月刊』1-5、一九五一年。

(102) 創文社、一九九二年。

(103)『人文雑誌』1957-2、一九五七年。

(104)『東北大学文学部研究年報』9。のちに『秦漢思想史研究』(日本学術振興会、一九五八年) に再録。

(105)『山口大学文学会志13-1』、一九六二年。

(106)『懐徳』41、一九七〇年。

(107)『政治大学学報』26、一九七二年。

(108)『待兼山論叢』第13号、大阪大学文学会、一九八〇年。

(109)『中国哲学史研究集刊』2、上海人民出版社、一九八二年。

(110)『東方宗教』62、日本道教学会、一九八三年。

(111)『華中師範大学学報』、一九九八年-2。

(112)『東方学報廿五周年論文集』。のち『老子の新研究』(創文社、一九五八年) に再録。

(113)『東方学』10、一九五五年。

(114)『日本中国学会創立五十年記念論文集』、汲古書院、一九九九年。

(115)『仏教文化研究』6・7、一九五八年。

(116) 山東大学出版社、一九九七年。
(117)『文字逍遥』(平凡社、一九八七年) 所収。
(118)『東洋学術研究』一七-五。
(119)『中国宗教思想2』(岩波講座、東洋思想第一四巻、岩波書店、一九九〇年) 所収。
(120)『人文学論集』第12集、大阪府立大学人文学会、一九九四年。
(121)『學林』第三一号、一九九九年。
(122)「北平華北日報史学周刊」5。一九三四年十月四日。
(123)『現代学報』1-8、一九四七年。
(124)『史語所集刊』17、一九四八年。
(125)『典籍論集　岩井博士古稀記念』、岩井博士古希記念事業会、一九六三年。
(126)『岩波哲学・思想辞典』、一九九八年。
(127)『戦国史』1997増訂版、台湾商務印書館、一九九七年。
(128)『宗教学研究』八七-3、一九八七年。
(129)『上海道教』一九九八年-2。
(130)『中国文化研究集刊』3、一九四三年。
(131)『東洋史学論集』1、一九五三年。
(132)『中国の科学と科学者』、京都大学人文科学研究所研究報告、一九七八年。
(133)『中国研究集刊』往号、一九九七年。
(134) 研文出版、一九九一年。
(135) 同右。
(136) 修訂本、東方出版社、一九九八年。
(137)『東方宗教』八〇、一九九三年。
(138) 中華書局 (香港)、一九九七年。
(139) 同右。
(140) 徐福に関する研究史は、柴田清継「徐福渡来説雑考—主として日明の資料に拠り—」(阪神中哲談話会第三三二回、一九九八年) 発表資料によるところが多い。
(141)『国学院雑誌』第二一巻三号、第五号、一九一五年。
(142)『東洋文化』第二五号、一九二六年。
(143)『熊野 (増補新版)』(原書房、一九八二年) 所収、一九五四年執筆。
(144)『ミュージアム』84、一九五八年。
(145)『日本的中国移民』(生活・読書・新知三聯書店、一九八七年) 所収。
(146) 中国航海学会、徐州師範学院主編、中国礦業大学出版社、一九八八年。
(147) 小学館、一九九〇年。
(148)『武庫川国文』第48・49号、一九九六・九七年。
(149)『藤原尚教授広島大学定年祝賀記念中国学論集』(藤原尚教授広島大学定年祝賀記念事業会、渓水社、一九九七年)

所収。

(150)『古田敬一教授頌寿記念中国学論集』(汲古書院、一九九七年)所収。

(151)『東洋古典学研究』第四集、一九九七年。

(152)『東方宗教』第四三号、一九七四年。

(153)『岩波哲学・思想辞典』、一九九八年。

(154)角川書店、一九九九年。

(155)広島文理科大学史学科教室編『史学研究記念論叢』、柳原書店、一九五〇年。

(156)創文社、一九八四年。

(157)『台湾中央研究院民族学研究所集刊』第一九期、一九六五年。

(158)『台湾中央研究院民族学研究所集刊』第二二期、一九六六年。

(159)『東方宗教』第四五号、一九七五年。

(160)中央公論社、一九七五年。

(161)『中国社会科学』一九六六-5。

(162)台湾学生書局、一九七八年。

(163)中公新書、中央公論社、一九八一年。

(164)『中国詩学会議論文集』(彰化、彰師大国文系、一九九四年)所収。

(165)『立命館文學』第五四一号、一九九五年。

(166)『學林』第二六号、一九九七年。

(167)『史学』1、中央大学、一九三〇年。

(168)『日本大学芸術学部紀要』14、一九八四年。

(169)『中国古代史研究』六、一九八九年。

(170)前掲『しにか』Vol.11/No.2、二〇〇〇年。

(171)前掲『しにか』Vol.9/No.12、一九九八年。

(172)前掲『しにか』Vol.11/No.2、二〇〇〇年。

(173)前掲『道家思想と道教』所収。

(174)『東方宗教』第九四号、一九九九年。

(175)『中国宗教思想1』(岩波講座、東洋思想第一三巻、岩波書店、一九九〇年)所収。

(176)『支那学』一一巻二号。

(177)『東方宗教』第六号、一九五三年。

(178)『東方宗教』第七号、一九五四年。

(179)陳鵬翔編『主題学研究論文集』、一九八三年。

(180)『東方宗教研究』一期、文殊文化出版社、一九八七年。

(181)『米沢国語国文』二二、山形県立米沢女子短期大学、一九九四年。

(182)岩波書店、一九八四年。

(183)平凡社、一九九一年。

(184)南華管理學院、一九九七年。

(185)『駒沢大学文学部研究紀要』第二十七・八号、一九六九・七

○年。

(186) 台湾中華書局、一九七〇年。原名は『神仙』。
(187) 四川人民出版社、一九九四年。
(188) 『中国道教』、一九九八年-3。
(189) 文津出版社、一九八九年。
(190) 陝西人民教育出版社、一九九一年。
(191) 中国華僑出版社、一九九三年。
(192) 『東方』中国戯曲研究専号、一九六八年。
(193) 荘厳出版社、一九七七年。
(194) 常春樹書房、一九七三年。
(195) 本社編、上海古籍出版社、一九九〇年。
(196) 寧人民出版社、一九九〇年。
(197) 捷幼出版社編輯部主編、捷幼出版社、一九九二年。
(198) 河北人民出版社、一九九二年。
(199) 『龍谷紀要』6-1・2、一九八四年。
(200) 『大阪府立大学紀要』人文・社会科学40巻、一九九二年。
(201) 『東方宗教』第六五号、一九八五年。
(202) 『アジアの歴史と文化』、汲古書院、一九九七年。
(203) 『東方宗教』第五四号、一九七九年。
(204) 前掲『吉岡博士還暦記念道教研究論集—道教の思想と文化—』所収。
(205) 中村璋八編『中国人と道教』所収、汲古書院、一九九八年。
(206) 『東方宗教』第三四・三五合併号、一九六九年。
(207) 『漢学論文集』二集（文史哲出版社、一九八三年）所収。
(208) 『中国学研究』二、大正大学、一九七八年。
(209) 漓江出版社、一九九三年。
(210) 前掲『しにか』Vol. 9/No. 12、一九九八年。
(211) 『岩波哲学・思想事典』、岩波書店、一九九八年。
(212) 『東方学報（京都）』六一、一九八九年。
(213) 『大正大学綜合佛教研究所年報』一一、一九九〇年。
(214) 『四川大学学報叢刊』第二五輯、一九八七年。
(215) 吉川忠夫編『中國古道教史研究』（同朋舎出版、一九九二年）所収。
(216) 中華大道文化、二〇〇〇年。
(217) 坂出祥伸監訳、大形徹・戸崎哲彦・山本敏雄訳、東方書店、一九九三年。
(218) 創文社、一九九〇年。
(219) 創文社、一九九八年。
(220) 京都大学人文科学研究所研究報告、春秋社、一九九八年。
(221) 前掲注215参照。
(222) 創文社、一九九九年。
(223) 創文社、一九九八年。
(224) 侯錦郎訳『中国学誌』五、一九六九年。

(225) College de France, Institut des hautes etudes chioises, 一九八七年。
(226)『早稲田大学大学院文学研究科紀要』三、一九五七年。
(227)『大東文化大学紀要』十三、一九七五年。
(228)「人文学論集」第6集、大阪府立大学人文学会、一九八八年。
(229) 山田利明・田中文雄編『道教の歴史と文化』(雄山閣出版、一九九八年) 所収。
(230) 全釈漢文大系、集英社、一九七五年。
(231) 平凡社ライブラリー、平凡社、一九九三年。もと中国古典文学大系第8巻 (平凡社、一九六九年) 所収。
(232) 中央研究院中國文哲研究所中國文哲專刊7、中央研究院中國文哲研究所籌備處、一九九五年。
(233) 百花文芸出版社、一九九六年。
(234) 角川書店、一九八八年。
(235) 朋友書店、一九八九年。
(236)『東方宗教』創刊号、一九五一年。
(237)『宗教研究』一三七、一九五三年。
(238)『岩波哲学・思想辞典』、岩波書店、一九九八年。
(239)『入矢教授・小川教授 退休記念中国文学語学論集』(筑摩書房、一九七四年) 所収。
(240)『國學院雑誌』第九十七巻十一号、一九九六年。
(241)『中国思想史研究』一九、一九九六年。
(242)『漢文学会会報』三〇、國學院大学大學、一九八四年。
(243)『東方宗教』八七号、一九九六年。
(244)『富士フェニックス論叢』、富士フェニックス短期大学、一九九八年。
(245) 前掲『吉岡博士還暦記念道教研究論集—道教の思想と文化—』所収。
(246)『広島大文学部紀要』三八-一。
(247) 中国古典新書、明徳出版社、一九八三年。
(248) 以下の『抱朴子』に関する文献目録は尾崎正治・平木康平・大形徹『鑑賞中国の古典⑨抱朴子・列仙伝』(角川書店、一九八八年) の参考文献〇抱朴子によるところが多い。尾崎正治氏の労作である。
(249)『支那學』第一巻第九号、一九二一年。のちに小島祐馬『中国の社会思想』に「抱朴子と道家の社会思想」として再録。
(250) 世界文庫刊行会、世界聖典全集後輯三、『道教聖典』所収、一九二三年。
(251) 時報文化、一九八六年。
(252)『静宜文理学院学報』第三期、一九八〇年。
(253)『支那』第二五巻第九号、一九三四年。
(254)『支那学研究論叢』第一号、一九三九年。
(255)『駒沢大学学報』第一輯、一九四一年。

(256)『文化』第二十巻第六号、一九五六年。
(257)『大阪府立大学紀要』人文・社会科学6巻、一九五八年。
(258)『中国文学』第一〇〇号、一九四七年。
(259)『東方学論集』第二号、一九五四年。
(260)『岡山大学法文学部学術紀要』第十号、一九五八年。のち「葛洪伝」に改題修訂の上、前掲『道教史の研究』に再録。
(261) 波多野太郎訳、『東方宗教』第五十九号、一九八二年。
(262)『東洋の文化と社会』第一輯、教育タイムス社、一九五〇年。
(263)『福井博士頌寿記念東洋思想論集』所収、福井博士頌寿記念論文集刊行会、一九六〇年。のち「抱朴子外篇—その内篇との関係—」に改題修訂の上、前掲『六朝思想史』に再録。
(264)『滋賀県立短期大学雑誌』B第三号、一九五三年。
(265)『文化史学』第十一号、一九五六年。のち「葛洪の政治思想と世界観」に改題修訂の上、前掲『六朝思想史』に再録。
(266) サーラ叢書2、平楽寺書店、一九五六年。
(267)『東方宗教』第七号、一九五五年。のち「鬼神と超克する仙道」と改題修訂の上、『六朝思想研究』(平楽寺書店、一九七四年)に再録。
(268) 前掲『吉岡博士還暦記念道教研究論集—道教の思想と文化—』所収。
(269)『東方学報』京都第五十三冊、一九八一年。
(270) 平楽寺書店、一九七四年。
(271) 第一章、第一節。
(272) 第一章、第三節。
(273)『芸林』第四巻第六号、一九五三年。
(274)『印度学仏教学研究』第二巻第二号、一九五四年。
(275)『東洋思想研究』第五号、一九五四年。翌年、「六朝の道流と教系の一試論」と改題修訂の上、『東洋思想の研究』(理想社)に収録。その後、法藏館『福井廣順著作集』第二巻に再録。
(276)『岡山大学法学部学術紀要』第五号、一九五六年。のち「論衡・潛夫論と抱朴子」に改題修訂の上、『道教史の研究』(岡山大学共催会書籍部、一九六四年)に再録。
(277)『岡山史学』第十号、一九六一年。のち修訂の上、前掲『道教史の研究』に再録。
(278)『中哲文学会報』第五号、一九八〇年。
(279)『天府新論』、一九九八年-2。
(280)『中華文化論壇』、一九九八年-3。
(281)『東北大学日本文化研究所研究報告』第九集、一九七三年。
(282)『宗教文化』第十一号、一九五六年。
(283) 前掲『吉岡博士還暦記念道教研究論集—道教の思想と文化—』所収。

(284) 前掲『東方宗教』第五十六号、一九七〇年。
(285)『歴史における民衆と文化—酒井忠夫先生古稀祝賀記念論集—』所収、国書刊行会、一九八二年。
(286)『駒沢大学文学部研究紀要』第十七号、一九五九年。
(287)『集刊東洋学』第三号、一九六〇年。
(288)『駒沢大学文学部研究紀要』第二十六号、一九六八年。
(289)『龍谷大学論集』、一九六一年。
(290)『哲学』第十六集、一九六四年。
(291)『史林』第四七巻第五号・第六号、一九六四年。
(292)『講座 道教』第一巻 道教の神々と経典、雄山閣出版、一九九九年。
(293) 文津出版社、一九八九年。
(294) 人民出版社、一九八九年。
(295)『岩波哲学・思想辞典』、岩波書店、一九九八年。
(296)『東方学報』京都第五十二冊、一九八〇年。のち『六朝精神史研究』(同朋社、一九八四年)に再録。
(297)『哲学』第十八集、一九六六年。
(298)『東方宗教』第二十九号、一九六七年。
(299)『哲学』第二十二集、一九七〇年。
(300)『東方宗教』第五十五号、一九六九年。
(301)『文学研究』第七十四輯、一九七七年。
(302)『大法輪』第五十二巻第十二号、一九八五年。
(303) 任継愈主編『中国道教史』(上海人民出版社、一九九〇年)第三章。
(304) 元典文化叢書、河南大学出版社、一九九八年。
(305)『東方学』97、一九九九年。
(306) 岩波文庫、一九四二年。
(307) 中国古典新書、明徳出版社、一九六七年。
(308) 平凡社、中国古典文学大系、第8巻、一九六九年。その後、一九九〇年に東洋文庫512・525・526に。
(309) 新編諸子集成、第1輯、増訂本、中華書局、一九八五年。
(310) 角川書店、一九八八年。
(311) 北京燕山出版社、一九九五年。
(312) 古籍今注新譯叢書、三民書局、一九九六年。
(313) 巴黎大學漢學研究所漢學通檢提要文獻叢刊2、Centre de la Recherche scientifique, 一九六五年。
(314) 前掲『吉岡博士還暦記念道教研究論集—道教の思想と文化—』所収。
(315) 国書刊行会、一九八〇年。
(316) 前掲『吉岡博士還暦記念道教研究論集—道教の思想と文化—』所収。
(317) 前掲『六朝道教の研究』所収。
(318) 道教刊行会、一九六八年。
(319) 明徳出版社、一九九一年。

(320) 京都大学人文科学研究所、二〇〇〇年。
(321) 京都大学人文科学研究所、一九九一年。
(322) 台北、輔大中文所、一九七〇年。
(323)『智山学報』第二二輯。一九七三年。
(324)『中華学苑』二八、一九八三年。
(325) 学生書局、一九九六年。
(326)『六朝詩論』(文津出版社、一九七八年) 所収。
(327) 前掲『中國古道教史研究』所収。
(328)『中国学論集 目加田誠博士還暦記念』、目加田誠博士還暦記念論文集刊行会、大安、一九六四年。
(329)『東方宗教』27、一九六六年。
(330)『立命館文学』四三〇～四三一、一九八九年。
(331) 学生書局、一九七九年。
(332)『東京支那学報』一〇号、東京支那学会、一九六四年。
(333)『政大学報』第三二期、一九七五年。
(334)『東方宗教』三十一号、一九六八年。
(335)『國學院雑誌』九〇-一〇。
(336) 前掲『吉岡博士還暦記念道教研究論集—道教の思想と文化—』所収。
(337) 同右。
(338) 学生書局、一九八六年。
(339)『文献』一九九八年-1。
(340) 日本歴史叢書 日本歴史学会編、吉川弘文館、一九六八年。
(341) 吉川弘文館、一九八六年。
(342) 大陸書房、一九七六年。
(343) 岩田書院、一九九九年。
(344)『東方宗教』第十八号、一九六一年。
(345)『考古学雑誌』27-8、一九三七年。
(346)『芸文雑誌』2-9。
(347) 上海古籍出版社、一九九六年。
(348) 岩波書店、一九五三年。
(349) 前掲『福井博士頌寿記念東洋思想論集』所収。
(350) 故宮叢刊、國立故宮博物院故宮叢刊編輯委員會、国立故宮博物院、一九八一年。
(351) 前掲『しにか』Vol. 9/No. 2、一九九八年。
(352) 汲古書院、一九八七年。
(353) 同朋舎出版、一九八六年。
(354) 臨川書店、一九八九年。
(355) 東方書店、一九九二年。
(356) 平凡社、一九九一年。
(357)「信州大学教養部紀要」第二八号、一九九四年。
(358) 同成社、一九九六年。
(359) 平成7年度～平成8年度科学研究費補助金(基盤研究(C)成果報告書(課題番号07610014)、一九九七年。

(360) 南天書局、二〇〇〇年。